

平成30年度地域志向研究助成金

研究の概要

水運ネットワーク 代表 田中 祥一

【研究課題】江戸～明治期における行徳神輿の製作と供給地域に関する研究

1. 研究概要

行徳地域にはかつて、3つの有力な神輿店（浅子、後藤、中台）が存在し、神輿を大量に全国に供給した。その数は総数2千とも言われる。しかし3つのうち2つ（浅子、後藤）は廃業し、現在行徳に残るのは1つ（中台）のみである。

本研究は、近世・近代期における行徳神輿の供給地（神社・町内会）を調査し、行徳神輿の歴史及び供給地の地理的特徴を考察する。さらには、行徳地域が持つ江戸・明治期における水上交通による地理的優位性との関係を見出すものである。

2. 調査方法

以下3つの方法により行徳神輿の所在調査を実施した。

① 書籍・インターネットによる行徳神輿の所在調査

- ・房総の神輿（内田栄一著）
- ・東京わが町 宮神輿名鑑（原義郎著）
- ・江戸神輿春秋<春の巻><秋の巻>（林順信著）
- ・江戸神輿と日本の祭り（小澤宏之著）
- ・歴史の浪漫街道（<http://rekishi-roman.jp/>）

② 神輿店等への取材等

中台神輿店 中台洋社長、椎名匠店 椎名正夫社長、藤戸伸治氏、菅谷敏明氏

③ 神輿愛好家からの資料提供

森田裕三氏（東京都三鷹市）、高野真一氏（千葉県旭市）、萬町親和會（千葉県匝瑳市）、木村喜久男氏（東京都江東区）

④ 神社等への取材等

大国魂神社（東京都府中市）、前橋東照宮（群馬県前橋市）、猿田神社（千葉県銚子市）、平塚八幡宮、伊奈波神社（岐阜県）

3. 調査結果

304件（重複排除後）の行徳神輿の所在情報が得られた。なお、当初は江戸・明治期のみを調査する予定であったが、これらは非常に少ないことが判明し調査範囲を平成時期まで拡大した。得られた所在情報を時間的かつ地理的に分析した。

① 時間的分析

グラフ1は行徳神輿の製作数推移である。江戸・明治期に製作された行徳神輿は非常に少ない。行徳神輿が多数製作されたのは大正時期以降であり、昭和1～10

年と昭和21～30年に製作数においてピークとなる。

② 地理的分析

行徳神輿の供給地域は、北は北海道、西は岐阜県に渡り広く分布する。

地図1・2は時代別東京圏における行徳神輿（後藤直光）の供給地域である。江戸～大正時期においては、多くが沿岸部および河川流域に分布し、内陸部に所在するのは僅かである。一方、昭和戦前においては、内陸部にも多数分布している。

4. 考察

調査結果より、行徳神輿は明治時代以降以下の歴史を歩んだことが推測される。

江戸期においては、自社仏閣の職人として活躍したが、明治期において廃仏毀釈のあおり、神輿製作という分野に活路を見出す。東京に近いという地の利及び、明治期に繁栄した江戸川の水運という優位性を活かし神輿販路を拡大した。

大正・昭和初期には東京の市街地が拡大し、祭文化が栄え神輿ブーム起る。水運からトラック輸送への変化が販路拡大を支え、関東における1大シェアを確立した。

しかしながら、高度成長期における祭文化の衰退とともに神輿の受注が減少したことが契機となり、2店は廃業した。

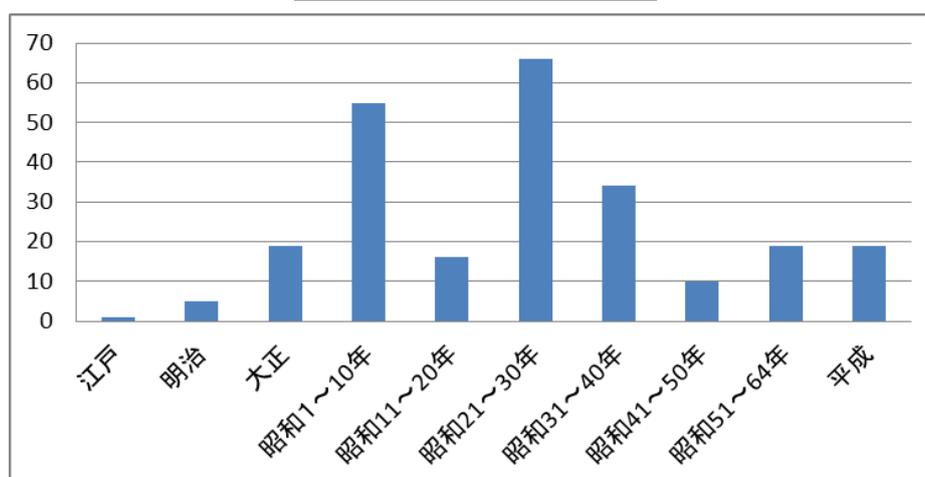
5. 成果の提供

調査により得られた304件の行徳神輿の所在情報リストの詳細（エクセルファイル）及び分析結果である所在地図は行徳まちづくり協議会に寄贈した。

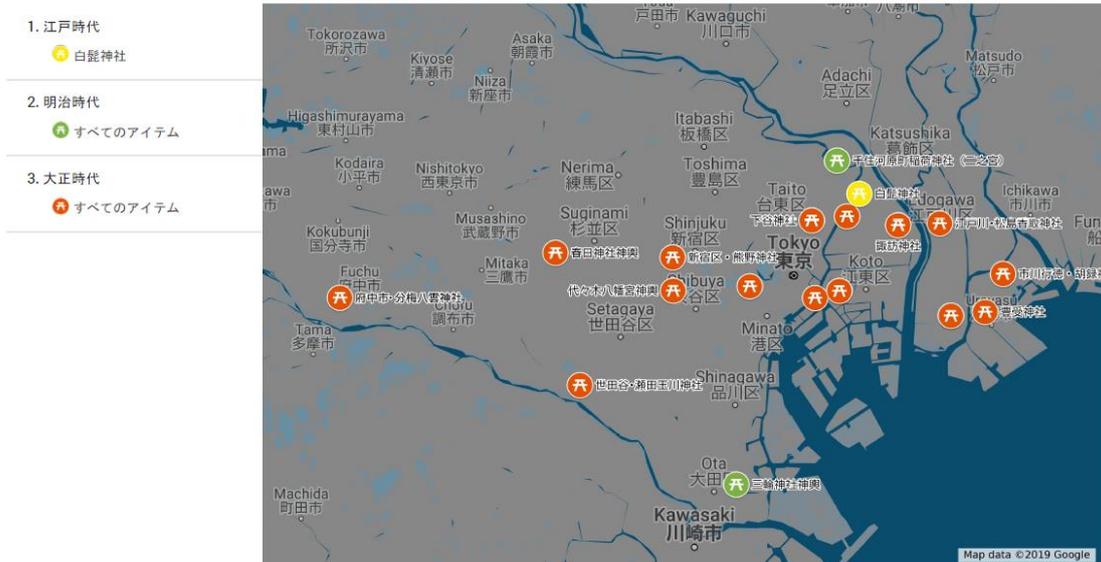
（「行徳まちづくり協議会」は、2017年5月に発足した市川市及び本行徳エリアの自治会長等により構成される行徳の歴史・文化の継承や地域の賑わいの創出などに取り組む団体である。）

6. グラフ、地図等

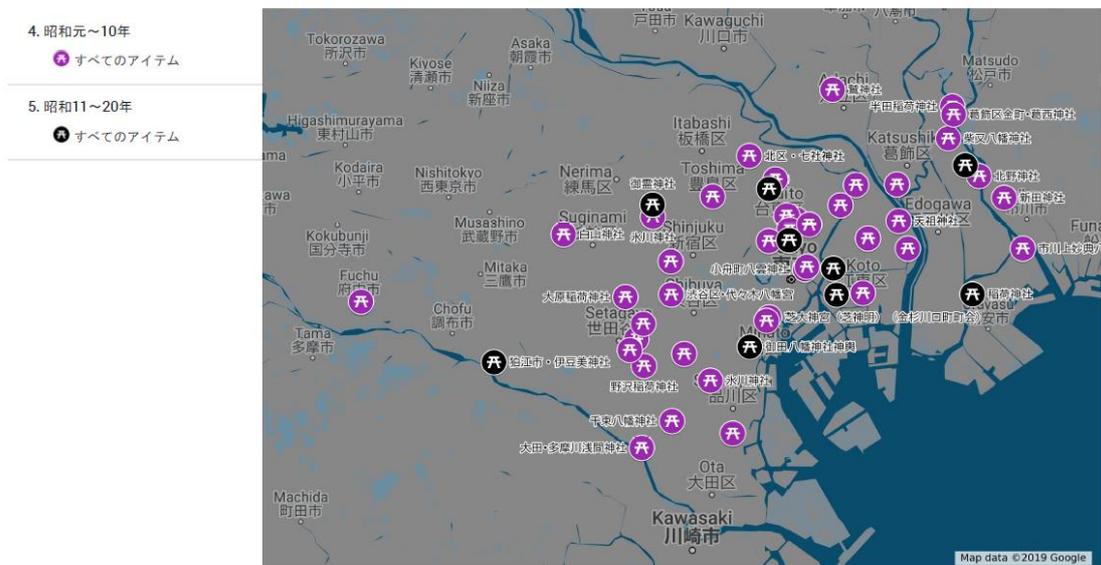
グラフ1：行徳神輿の製作数推移



地図1：行徳神輿（後藤直光）の供給地域 東京圏（江戸～大正）



地図2：行徳神輿（後藤直光）の供給地域 東京圏（昭和戦前）



以上